

「神にはなんでもできる」－マタイによる福音書講解説教 80－

エレミヤ書 第32篇 17節～19節  
マタイによる福音書 第19章 16節～30節

説教 岡村 恒牧師

「人にはそれはできないが、神にはなんでもできない事はない」。(26節)主イエスが弟子たちにお答えになった言葉です。

主イエスが、「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」(24節)と言われたのを聞いて、この日弟子たちは非常に驚いて言いました。「では、それが救われることができるのだろうか」。(25節)

当時のユダヤ人にとって、豊かな財産を持っているということは、神に愛され、祝福されているしるしでした。ましてや、この日主イエスのもとに来た青年は、律法の戒めをこどもの頃から守ってきた模範的なユダヤ人でした。それなのに、「らくだが針の穴を通る」ことよりもあり得ないことだと言われたのです。

この日、主イエスの元に来た青年は、「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」(16節)と尋ねました。《この私が》永遠の生命を得るためには、《この私は》どんなよいことをしたらいいでしょうか、と尋ねたのです。この青年が見ていた世界や救いは、いつでも自分自身が主語である世界であり、救いでした。《この私》が律法を守り、捧げ物をささげて生きて来た世界です。

らくだは、当時のユダヤ人が目にすることができた最大の動物で、らくだが針の穴を通るといっては、絶対に不可能だという意味です。主イエスは、「人にはそれはできない」とはっきりおっしゃいました。どんなに律法を完全に守ることができても、どんなに誠実に生きて神の祝福を受けたとしても、まだ十分ではないのです。弟子たちもこの青年と同じように考えていたので、非常に驚きました。弟子たちもまた、《私》が主語の世界に留まっていたのです。

私たちが神に赦され、永遠の生命を手にするのことができるのは、ただ神の憐れみにより、神の恵みによるのです。「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。」(マタイによる福音書 6章33節)と言われる通りです。この私が何をしたら良いか、という呪縛から解放されて、《まず神が何をして下さったのか》に心の目を向けたら良いのです。

青年が悲しみながら立ち去り、主イエスが、神が主語である救いについてお語りになった時、

弟子たちはまだ驚くほかありませんでした。その時主イエスは、「彼らを見つめて」(26節)お語りになりました。主のお心を少しも理解できない私たちに向けて、深い憐れみに満ちたまなざしは今も注がれています。

弟子たちはここでもなお、《私》は「いっさいを捨てて、あなたに従いました。ついては、何がいただけるのでしょうか」(27節)と尋ねます。《私》が主語で、「いっさいを捨て」たと思い違いをしていました。実は、私たちは最初から何も持っていなかったのです。神が命を与え、肉体を与え、人生を用意し、さらに神の恵みを注いで信仰をお与え下さいました。本当は、私たちが捨てたものなど何一つ無いのです。そのような私たちを神は救い出し、神の子として、全世界を相続するとまで約束して下さいました。主イエスを信じる者は、帰るべき居場所を神の国に持ち、新しい天と新しい地を手にするのです。これは、らくだが針の穴を通ることよりもはるかに《あり得ないこと》なのです。

救いとは、《私》が主語である世界が粉々に砕かれ、《神》が主語の世界に生きるようにされることです。宗教改革者のマルティン・ルターもこの解放を味わいました。神を求め続ける中で、なお一点が欠けていることに気づき、聖書から《神》が何を語りになっているかを聞き取りました。この私は、ただ神の憐れみ、恵みによって罪を赦され、神の子とされた。この私が神の国に入ることなどあり得ないことだが、ただ神が、できないことの何も無い神が、この私を赦し、救い出して永遠の生命を与えて下さった、とルターは福音にであったのです。

全知全能の神は、その御力を、私たちを滅ぼすためにではなく、私たちを生かすために使ってくださいました。起こり得ないことを実現し、赦されざる者を赦して下さいました。これが聖書に記された福音です。

聖書には、《私》を主語とする滅びの世界から、《神》を主語として私たちを生かす世界へと、私たちを導き入れる福音が記されています。やがて終わりの日、あり得ないことが完成したことを私たちは目にします。私たちに与えられた赦しの大きさ、その確かさを繰り返し確認しながら、主を讃美しましょう。

(記 岡村 恒)